

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 史學科信州の見學旅行記   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 大宮, 忠英(Omiya, Tadahide)   |
| Publisher        | 三田史学会   |
| Publication year | 1927  |
| Jtitle           | 史学 Vol.6, No.1 (1927. 3) ,p.149- 152  |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 彙報  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0150">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19270300-0150</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 彙報

### 史學科信州の見學旅行記

文學部史學科の年中行事の一つである見學旅行は、種々の都合により延期せられてゐたが、十月下旬之れを決行することとなつた。休暇中の如く、十分なる期間を利用し得なかつたことは遺憾であるが、時恰も秋色酣なる、長野上田方面の錦に色彩られた史蹟を訪ふことは、期間短しと雖も、また多少その恨を補ふに足るものがあつた。

上野驛を出發したのは、十月二十二日であるが、この日朝來の快晴は天亦我一行に幸するものゝ如く、伊木、橋本兩先生を始め、先輩宮島氏、及び學生十名、都合十二名の一行は、午後十時五分發の列車にて、まづ長野市に向つたのである。月光に晝き出された武藏野を蹴つて、汽車は高原へ進んで行く。夜陰は次第に深く冷氣彌々加はる。

二十三日。夢破るれば、千曲川の盆地が、朝霧の中から、姿をぼんやり現してゐる。

午前六時十分、汽車を棄て、長野市に旅行の第一歩を印した。冷氣に満ちた山國の朝の町を先着の驛君に導かれて、一先づ『さびす屋旅館』に至る。此處にて朝食を終へ、小憩の後、直ちに發

足して善光寺に向つた。道すがら苜蓿堂を訪ひ、更に十分餘にして、定額山善光寺の山門に達した。大本願、大勸進を左に見ながら、本堂に至る。諸國より集る信者等が、堂前に列を作りて、年若き尼姫の下山を待つてゐるのも眼を引いた。是等善男善女に幸あれかしと祈りつゝ、我等も、また人並に戒壇巡りを終つて堂を出た。

寺の東一町餘の坂を登れば、丘上に城山館あり、此處は天文廿三年甲越兩軍對陣の時、謙信の陣した所で、川中島は遠く豁け、信玄の陣地であつた有坂の茶白山は、西方指呼の中にある。歸路大勸進の寶物を一覽した。

書畫佛像等數多き中に、信玄書狀及び天海自筆の書狀など、特に注目させられた。大本願の寶物觀覽は、發車の時刻切迫せるため、遺憾ながら割愛せざるを得なかつた。

長野市を去つて姨捨に向ふために、午前九時十五分發の汽車に乗る。善光寺の門前町たる長野市が、如何にも近代的發達をなして居るのに驚いたのであるが、それもやはり如來の光被によることは、一見して了解せらるゝ所である。諸國より參集する善男善女の數の増減は、同時にまた長野市の盛衰を示すものであらう。

市の外形のみより見れば、淺草の觀音様と中店とを攢大した様なものであるけれども、その中の空氣には落着きと無垢な神々しさとがあつた。この清き淋しきがある限り、長野の町は榮えて行くことであらう。少なくとも紅葉に覆はれた朝の長野市はかく感ぜられた。

そんなことを考へてゐる中に、汽車は何時しか千曲川の左岸に

着いてゐた。

十時二十分一行は車を捨て、姨捨公園に登り展望を縦にする見渡せば千曲の流は長蛇の如く、妻女山、川中島は、薄霧こめて確かとも見えず。近く見下す四十八段の傾斜地は、名も高き田毎の月の名所であるさうだが、今は秋の實りに影宿すべきもない。

此の中腹に、姨石と觀月堂とがある。更科や姨捨山の傳説に異説を挟みながら、山を下つて徒歩八幡村に入る。

姨捨より屋代に至る街道に沿うて、並んでゐる一條町に、縣社武水別神社がある。簪の形に似たるこの町も、この社を中心として發達したものであらう。多くの人々の信仰を一つに集めたこの神社の建築や、そのプランにも、異風が認められるのであり、八幡様まで通つてゐるこの社の例祭が、十二月であることなどによるも、特異の傳統を有することが推せらるゝのである。武勇の神の御使と稱せられる鳩の群が、秋の日に翼を干してゐるのも面白い。

社司松田牧太郎氏邸に於て、神社並に同氏所藏の古文書を拜見した。武田信玄、上杉景勝の朱印狀を始め、森、眞田兩家の黒印狀、禁制、大久保長安狀、神道裁許狀等の外に、徳川時代の訴訟文書も數通あつたが、特に一行の興味を唆つたものは、信州八幡宮御頭帳(自元祿元年至同七年)及び、八幡宮八講頭番帳(自元祿八年霜月十五日至萬延元年十二月)の二つであつた。有益なる古文書の見學をなすことを得た上に、午餐の饗應をさへ受けたる一行は、その厚意を感謝しつつ午後一時半松田氏邸を辭し、二臺の自動車に分乘して、河東鐵道の分岐點たる屋代驛に至る。同二時五十九分、地方にしては珍しく大きい電車に乗つて、松代驛に

向ふ。車中伊木先生の川中島實戰談は大いに興を惹く。當年(永祿四年)謙信の陣地であつた妻女山には、時間なくして登るを得なかつたが、その麓を貫ける隧道を抜けて、間もなく三時二十分松代驛に下車し、直ちに町長矢澤頼道氏邸を訪ひ、その所藏の古文書を見る。矢澤氏は舊松代藩の藩老で、その祖先は、小縣郡矢澤の城主であつたと言ふ。舊き名家であるだけに、今猶ほ古文書數十通を藏し、殊に幕末の名藩主眞田幸貫及び偉人佐久間象山の眞蹟は、最も注意を惹いたものである。

矢澤家の見學を終つて、直ちに舊藩菩提寺たる眞田山長國寺に至る。特に當町史編纂者の大平間喜多氏が、案内の勞を取られたのは一行の幸であつた。本堂の棟なる眞田家の家紋六文錢が、第一に眼につく。その左右に聳ゆる鯨鉢は、舊城門のもので、又堂内に保存されたる朱塗の太鼓も、同じ城門にあつたものとのことである。堂の後方に廻れば、眞田家累代の靈屋がある。もとはここに信弘、信之、幸道、信政、及び幸道母の五靈を奉置したのであつたが、維新後幸道の靈屋は、本堂裏に移して開山堂となし、同母の靈屋も、他に移されたので、今は信弘、信之、信政の三靈廟だけが残つてゐる。就之、信之のものは、寛文元年の造營で、その規模は雄大とはいへないが、輪奐の美は、或は芝増上寺なる徳川家靈廟にも比せらるべきものがある。内部の天井畫及び三十六歌仙の額は、何人の作かは知らぬが、探幽の筆と稱せられて居り、左右の壁畫は、松代の生んだ幕末の名手三村晴山(樂眞濟)の筆である。なほ此の靈屋の正面破風の所にある鶴の彫刻は、甚五郎の作と傳へられ、深夜竊に舞ひ出て、田の穂稻を喰ひ荒したので

鐵の鎖に繋がれたといふ傳説を持つてゐる。靈屋の拜觀を終つて更にその背後の塋域なる歴代の墳墓に參拜した。その中幸村の墓は、舊幕時代には幕府を憚りて建てなかつたが、近頃新設されたものださうである。寺を辭して、名高い象山の麓有樂町に佐久間象山の邸址を訪ふ。今猶ほ遺愛の柳や躑躅の老株を始め、井戸や庭池などが存して、保勝地となつてゐる。

それから松代町を横ぎりて、徒歩海津城址を訪れた。舊城址は殆んど破壊せられて、電車の敷地や桑田と化し、僅に本丸のみが石壘を殘し昔を偲ぶ面影を留めて居るに過ぎない。此處に登つて千曲の河筋の變遷を見、天文永祿當時の要害たりし所以を考へなとして、大平氏に別を告げ、更に自動車を驅つて、永祿四年九月甲越兩將接戰の地と傳へらるゝ川中島八幡原に向つた。この地は方一町ばかりの區域にて、小疎林となつてをり、中に二つの小祠がある、あたりの風物何となく武藏野を偲ばせる。秋深きこの夕暮に梢を渡る風の音は、そゞろに悲愴の感を唆つたのであつた。急ぎ松代驛への歸途、水澤の典厩寺に車を停めて、武田信繁等の墓を弔つたが、時既に暮色が迫つて居た爲め、碑面の文字も見ることが出來ず、一同の面上にも疲労の色が現はれた。松代驛で一時間を費し、今夜の宿泊の豫定地である別所へ急いだのであつたが、電車の都合悪しく、別所温泉『花屋ホテル』に到着したのは正に夜の九時であつた。温泉にひたり一日の疲労を醫して寢に就いたのは、十一時過ぎる頃であつたらう。

二十四日、一夜にして元氣を恢復した一行は、山間の清澄な空氣を吸ひ、木間渡る朝日を背に受けながら、北向觀音堂や、高く

斷崖に建てられた藥師堂（瑠璃殿）に詣て、更に谷川を渡り、紅葉の色深き山路を登りて、宗福山安樂寺に詣てた。禪寺特有の清楚な構造が、紅葉と調和し、一切經藏の右方の山腹に、八稜西層の塔が聳えてゐるのも趣を添へて居り、殊に秋興の深きを覺えたのであつた。縁起によれば、寺は聖武天皇の天平年間行基菩薩の創建せるものと傳ふるのであるが、屢々天變或は兵火にかゝり、その後北條貞時再興し、また大光智照禪師の中興を経て、今日に及んださうである。かの古塔は後伏見帝の正應元年北條貞時及び彼の歸依篤かつた樵谷惟仙禪師の發願建立せるものであり、後世の修補の跡も相當に認めらるゝのはあるが、確かに一種特異の建築様式を備へた珍らしい建物で、特別保護建造物となつて居る。その右方の小堂内には、惟仙禪師及び宋人幼牛惠仁禪師の木彫像がある。何れも嘉曆四年に造られた鎌倉時代の代表的彫刻で、また國寶となつて居る。

紺色の空に映えてゐる別所の紅葉を後に眺めながら、電車に乗りて下郷に向つた。下郷には、國幣中社生島足島神社がある。本社は、大八州即ちこの國土が祭神であるので、別に御神體はなく唯拜殿があるのみで、頗る特殊の神社である。本社と相對して諏訪神社の社殿があり、例の御柱が聳えてゐる。その所藏の古文書には、永祿二年秋九月の武田信玄自筆の願文を始め、同人社領安堵狀、眞田昌幸、信之の寄進狀その他法度書、目安狀等存するのであるが、なほ注意すべきは、武田氏諸士の起請文が、八十三通も残つてゐること、かく一個所に多數の起請文を所藏するは他にその例を見ざる所である。當社の境内は甚だ廣大とは言へまい

が、四方に土居を廻らし池などがあつて、整つた感じのする靈域である。神宮寺跡はその横にあつて、今は桑畑となつてゐる。それに接して長福寺があり、舊神宮寺の佛像などを所藏するも、特に記すべき程の事は見當らなかつた。

正午下郷を發車して上田原に下車し、下條なる宮本君の生家て歡待を受け、更に同君の案内で自動車を行らせ上田城址を踏査して上田驛に着し、間もなく三時十二分同驛を發して歸京の途に就いた。かくて信州の秋に名残を留めながら、また千曲川平原の過去現在に親しみ得たことを喜びながら、午後十時上野驛に歸着したのであつた、なほこの旅行見學に際し、以上記載せし諸氏を始め、その他各地の有志諸氏が種々の好意を表せられしことは、深く一行の感謝する所である。  
(大宮忠英記)

密贈交換圖書雜誌目錄

- 洛北修學院林道しるべ 杉 浦 丘 園
- 東洋文化——卅二 東洋文化學會
- 東洋學報十六ノ一。 東洋 協 會
- 考古學雜誌十六ノ十、十一、十二。十七ノ一。 考 古 學 會
- 墓蹟四、五。 墓 蹟 發 行 所
- 墓碑史蹟研究卅、卅八、卅九、四十。 同
- 龍谷大學論叢二七〇、二七一。 龍谷大學論叢社
- 民族二ノ一、二。 民 族 發 行 所
- 佛教研究七ノ三、四。 大谷大學佛教研究會

紀伊郷土研究一、二、三。 紀伊郷土研究社

雜誌展覽會出品目錄 撫 順 圖 書 館

人類學雜誌四一ノ十一、十二。 東 京 人 類 學 會

僧說一ノ四。 日 本 傳 說 學 會

歴史と地理十八ノ四、五、六、十九ノ一。 史地學理學同攻會

神社協會雜誌廿五ノ九、十、十一、十二。廿六ノ一。 神 社 協 會

史學雜誌三七ノ九、十、十一、十二。卅八ノ一。史 學 會

史林十一ノ四。十二ノ一。 史 學 研 究 會

國學院雜誌卅二ノ十、十一、十二。卅三ノ一二。 國 學 院 大 學

國民經濟雜誌四一ノ四、五、六。四二ノ一、二。 神戶高等商業學校

藝文十七ノ九、十、十一、十二。十八ノ一。 京 都 文 學 會

日本文化大正十五年九、十、一、十二月。昭和二年一、二月。 里見日本文化研究所

經濟史講義 田 崎 仁 義 氏

以 上

慶應義塾大學教授 加藤繁氏は、その著「唐宋時代に於ける金銀の研究」について、今回、恩賜賞を下賜せられたり慶賀にたへず。